

2022年度(令和4年度)  
カラ事業報告書



手拍子に合わせて歌う女性たち

## 2022年度 マリ支援事業のご報告

本来は2023年3月末までの現地活動の報告ですが、今年6月にカラが突然受けた現地での惨事を、最初にお知らせします。

### イスラム過激派の突然の襲撃に遭う

「ムラカミ、ブラジェ村で建設中の産院が破壊された、マソン(左官)もドッグチギ(村長)も殺された」。2023年6月12日、カラのマリ・バマコ事務所のスタッフ、ラミン・ジャワラからこのような電話が入りました。それはいつもの元気な声とは違い、誰? と聞き返すほど沈んでいました。なぜ? 誰に? と聞き返すと「真夜中にイスラム過激派がブラジェ村を襲撃した。バマコ市も非常に危険で町から出られず、ブラジェ村へ行くこともできない」と、耳を疑うような報告でした。

その後のラミンからの報告では危険な状況は依然として続き、カラの活動地域の村はイスラム過激派にコントロールされ、農作業もできずに村の人たちは知人を頼って逃げているとのこと。これまで建設してきた小学校や産院・診療所はどうなっているのか、たくさんの家畜はどうなっているのか、と心配が絶えません。

首都のバマコ市内も常に危険度が高い状況が続いています。その中でマリでは現憲法の改憲のために住民の賛否を問う投票が6月18日に行われました。この結果、75%の賛同を得て、現在の軍政権から民間政権への移行が始まるとされます。現在の暫定政権は来年2024年に大統領選挙を実施する予定です。ただ、今回の選挙は、投票権のある国民すべての選挙とされていましたが、危険な地域に住む人たちの投票は行われなかったということでした。イスラム過激派の妨害があったのか、危険であるため人々は外出を控えたのか不明です。いずれにしても、日本の外務省からの危険状況を示す地図で、マリは常に真っ赤(最高度の危険状況を示す色)に塗られたままです。

### 殺し合わずに暮らせるようになってほしい

2022年に私がマリに渡航を計画した時に、入国はできるが地方の活動地域へは行くことができない、と在マリ日本国大使館から厳重に注意があり渡航をあきらめた経緯がありました。マリ国内でフランス人ジャーナリストがイスラム過激派によって誘拐される事件も発生しており、外国人滞在者にも危険が及び、すべての人の日常生活が脅かされていました。この状況はカラだけではなく、他の外国籍NGOの支援活動にも非常に大きく影響していました。そのため、カラが所属するクリコロ地域の外国籍NGOと共にクリコロ県庁やコミュン長に再三相談して、このような時こそ支援が必要であると訴え、支援の安全を保障するようマリ政府に申し立てしていました。

そのような中、予定よりかなり遅れましたが、3月末にクリコロ県の医療を総括するクリコロ病院長や保健省と相談して、ブラジェ村産院・診療所建設用資材を村に運び込み、建設開始の見通しがついていたのです。しかし、再びイスラム過激派の襲撃がマリ南部へ広がり、カラの活動地域まで迫り、シラコロラ村から北へ約20kmのバナンバ町やナラ町への襲撃が起きました。そして、とうとうブラジェ村も襲撃を受けてしまったのです。

イスラム過激派は「モスク(イスラム教の寺院)以外は建設してはダメだ」と言います。彼らが病気になるたら盗んだ薬剤を使用するのだろうか? 彼らも家族があるだろうに襲われた苦しみは知っているはずだ、と思います。殺し合いが続くちは人々の幸せはないだろう、ただ多くの若者は上部の人から洗脳され、給料をもらい、従っているだけで、これも貧しさゆか、と私は考えています。もし、普段から人々を傷つけないで収入を得ることができるような国家プロジェクトができれば、誰も人を殺してお金をもらって生きて行くような暮らしはしないだろう、そんなプロジェクトが国家レベルでできないものなのでしょうか。

情報の乏しさにいらだつ日々でしたが、7月になって元カラのスタッフだった加藤聡子さんが、4年間の在ブルキナファソ日本国大使館での開発協力や広報文化の任務を終え、帰国したので話を聞くと、次のように教えてくれました。

「マリ治安は、政府軍の不断の努力にもかかわらず悪化の傾向にあって、これまで外務省の危険レベル3であったクリコロ州(上記ブラジェ村も同州内にある)を含むマリ南部地域にもイスラム過激派組織によるテロや襲撃事件、外国人に対する誘拐や殺戮が多発していることから、レベルを4(退避してください)に引き上げています。テロの脅威は今では北部だけでなく全土に及んでいて首都のバマコでも危険レベルを2から3に上げています。ブルキナファソも同様に危険な状況になりつつありますが、まだマリに比べると落ち着いています」

### ①助産師の育成

先述のブラジェ村(人口511人)で、安全な出産と、人々の健康改善の向上を目的として、村民の長年の希望であった産院・診療所の開設に向けて動き出しました。この事業は2022・2023年度の2年間にわたり、2022年度は、産院で責任を持って専門的に働くことのできるブラジェ村出身の女性の助産師を育成します。さらに、村の男性が協力しての産院・診療所の建設と、その運営管理をするための村人委員会の組織化とその業務の指導をします。これらの指導には、元スタッフのアワ・カンサイがボランティアで協力してくれることになっていました。

ブラジェ村民から助産師になるために選ばれた女性は、サリー・クリバリー(23歳、二児の母親)です。小・中学校を卒業後、看護師育成学校へ進みましたが、その知識が広く活用されないままに農家に嫁入りました。今回、改めて学び直し、村だけではなく近郊の人々にも貢献できるような助産師と看護師を目指します。サリーは非常に優秀な女性であると村民から大きな期待が寄せられています。

助産師育成研修は当初、2022年5、6月頃から1年間と計画していました。しかしサリーから、農繁期には出かけることできないので、秋の農作物の収穫後からのスタートにしたいという希望がありました。主婦が幼い子供を家族に託して1年間家庭を留守にするのですから容易なことではないと思います。多くの負担が家族には課せられると察します。そのような事情で2022年10月末に村を旅立ちました。助産師研修の終了は2023年10月となります。

サリーはバマコに着いてすぐ、アサコバファ診療所のドクタージャラの下で研修を始めました。毎日真面目に学んでいて非常に優秀な女性であると、ラミンを介してドクター



アサコバファでの助産師研修開始に当たって。左からマダムクリバリー、助産師の2人、指導医のジャラ氏、看護師。



多くの患者さんが来院して乳幼児健診を受けています。

ャラから報告がありました。この研修資金はワールドファミリー基金によるものです。アサコバファ診療所はバマコ市の中心地から外れてはいますが、往復には中心地を通ります。現在も危険な状況のバマコですから、恐怖を感じながら日々通勤しているかもしれません。

ブラジェ村では、今回のような惨事がありました。サリが研修で得た技術は、何らかの工夫で村人の健康と安全な出産に貢献できると考えています。カラが開設する産院と診療所を伴う医療施設は、開設後、すべて地域住民が運営管理することを条件にしています。カラはすでにこのような医療施設をこのブラジェ村の施設を含めて18ヶ所開設しました。それぞれに問題が発生しているとは思いますが、その都度村で解決しています。



アサコバファ診療所、これは日本政府の支援で完成しました。

## ②ブラジェ村産院・診療所建設

助産師育成研修と並行して、産院建設を2023年1月頃から始める予定でした。建設資金の一部は盛岡青年会議所メンバーのクラウドファンディングによるものです。クリコロ県庁や保健省と相談し、危険が薄らいたとみられた3月末からようやく建設を開始。村の男性の積極的な協力を得て、雨季の農作業が始まる前に落成する計画でした。

しかし6月、完成間近になり外装作業を行っていた時、先述のような惨事が起こり、死者まで出てしまいました。カラの活動地域の村に住む唯一のスタッフであるムーサ・ジャラからの連絡だけが頼りですが、彼も危険な状況のために他の村への往来が難しいということです。状況が落ち着くのを待つより方法がありません。現在(7月)も、電話もメールでの連絡も現地からは途絶えています。マリ国内で通信制限があるのかもしれませんが。

これらの事件を考える時、私はご支援くださった方々に大変心苦しく思っていますが、カラはどうすることもできません。どうぞ現地の事情をお察し下さい。

今回の惨事の連絡が届く前に非常に嬉しいニュースがありました。それは、過去にカラが新設したドウンバ地区とトゥグニ地区の産院・診療所11ヶ所(11ヶ村)のうち、コニナブグー村産院・診療所とシラブレ村産院・診療所(この2ヶ所はカラの会員の個人的な寄付による建設です)が、これまで貯えてきた



建設中のブラジェ村産院(5月時点)。この後更に建設が進みましたが、6月中旬にイスラム過激派によって破壊されました。

収入を活かし、改築をするという知らせです。いわゆる自力での改築です。カラが建設した時は最低限必要な資材のため、土レンガが主でした。しかし今度はセメントを主とした建物になりました。村の管理委員会は【産院・診療所からの収入はそれらの維持運営のために使う】と言うルールを厳守しているのです。今後、他の村の産院診療所も真似るようになると思います。

ただ、今後の産院や診療所の建設について、マリ保健省からの通達があり、建設はセメントであること、医師か助産師、または看護師を常勤させるようにという指令が出されました。そのため、これからの建設は資金的に難しくなることが予測されます。



ブラジェ村産院用に製作された看板

## 2022年度収支決算書

### 2022年度(令和4年度) カラ会計報告 (円)

収入の部		支出の部	
2022年度会費	590,000	マリ事業費	
寄附金	1,392,447	建設費・管理費・人件費	1,852,249
助成金(WF基金)	200,000	日本事業費	
販売収入	102,000	管理費・人件費・交通費 ・通信費・事務用品費、その他	107,075
預金利息	5	広報費・ 年次報告書作成費 (印刷・レイアウト・郵送費)	53,559
		マリへ銀行送金手数料	15,660
		会費入金手数料郵便局	5,280
計	1,724,408	計	2,033,823
前年度から繰り越し	388,515	次年度へ繰り越し	639,144
合計	2,672,967	合計	2,672,967

三菱UFJ銀行年度末残 639,917円

ゆう貯銀行 年度末残 12,044円

年度末現金残 1,008円 (使途不明金 13,825円)

カラ会計 監査担当 令和4年6月17日 正山 龍田 神山 明子 滝口 茂子

## 2022年度日本国内での活動

- 2022年 6/2 第18回ヘルスソサエティ賞受賞(帝国ホテル)  
7/24 第41回歯科医学会教育学会にて特別講演(ビデオ)  
10/20 第86回学校歯科保健研究大会にて特別講演(甲府市)  
11/14 第13回KYOTO 地球環境の殿堂 表彰式(京都 国際会議場)

### チャリティーコンサート「かけはし2023」開催のお知らせ

2023年12/10(日曜日) 日本歯科大学8F富士見ホールにて  
原田靖子さんの歌とマリ出身で京都精華大学の前学長ウスビ・サコ氏のお話です。  
詳細はカラ事務局(03-3929-5767)までお問い合わせください。

## お願い

ご報告いたしましたように、現地では思いかけない事態が発生しました。死者まで出たことは非常に恐ろしく悲しいことです。近頃の世界の緊迫した状況が、そのままマリにも起きました。7月末のラミンからのメールでは、ニジェールでクーデターが起き、今はマリ、ブルキナファソ、そしてニジェールと3ヶ国が軍事政権下に入ってしまったということでした。

このブラジェ村の惨事は、皆さまのご協力やご支援で自立をメインとした支援事業が順調に進み、現地の人々の意識が向上し、村の自立発展途上でのできごとです。しかし、いかに個人の意識が向上しても国の統治が良くなると、常に弱い立場の人たちへの犠牲が増えてくるだけのように思います。カラの支援地域の村々の人たちはどうしているのか、と思いを巡らせるだけです。今、現地では食料不足になっています。通常の農作業ができない状況で、この食料不足は長期にわたると思います。これをお読みの皆さまに主食のトウジンヒエ購入のための支援金のご協力をお願い致します。送金先は次の口座へお願い致します。

銀行名:三菱UFJ銀行吉祥寺支店 口座番号:0878624

名義:カラ西アフリカ農村自立協力会 代表 村上一枝

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

代表:村上 一枝

東京事務局

〒177-0054

東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101

Tel:03-3929-5767

E-mail: [centre@ongcara.org](mailto:centre@ongcara.org)

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096

文責:村上 一枝 編集:宇佐見 靖子

ご注意ください:任意団体となり会の名称は「カラ西アフリカ農村自立協力会」となりました。